

## 木羽敏泰先生を偲ぶ

1913年大阪市に生まれる。大阪府立浪速高等学校を経て、1937年東北帝国大学理学部化学科卒業。同年東北帝国大学助手、1939年金沢工業高等学校に奉職、1941年名古屋帝国大学工学部助教授、1947年理学博士。1949年金沢大学教授（理学部分析化学講座担当）。1969年金沢大学理学部長、1975年同大学付属図書館長に併任。1978年日本分析化学会会長。1979年金沢大学を定年退職。同名誉教授。日本分析化学会名誉会員。1979年金沢工業大学教授に就任。1981年同大学研究部長、1984年金沢工業大学学長。1988年任期満了により同学長を退職。中日文化賞、日本分析化学会学会賞、日本化学会賞、金沢市文化賞、勲2等瑞宝章などを受けられた。

本会名誉会員木羽敏泰先生には去る2月20日に103歳の天寿を全うされました。1月4日に入院されましたが、23日には“今退院してきたところだ”とお元気そうなお電話を頂きました。ご長男の信敏さんから先生の訃報を知らされた時は、まだまだ長生きされると信じていただけに本当に驚きました。

先生は東北帝国大学理学部化学科での卒業研究に分析化学を専攻して、小林松助先生のご指導を受けられました。助手になられてからは、「有機質沈殿の電圧滴定」について日本化学会誌に第5報まで発表されました。おりにふれ、小林先生は本当に無欲な方で、“この研究についてはあなたがオーソリティーですから”と仰って、論文にも決してご自分を共著者にはなさらなかったと話されました。当時の大先生はお弟子さんを余程信頼しておられたのではないかと羨ましく思ったものです。

1939年から2年間金沢高等工業学校に赴任されましたが、これが先生と金沢との繋がり初めになったように思います。その後名古屋帝国大学工学部に助教授として赴任されました。ちょうど第二次世界大戦が始まって研究環境が最悪の時代で、1945年には工学部校舎およびご自宅が空襲で全焼するという不運に遭われました。その逆境の中で1943年～49年にかけて日化誌に12報が掲載された「硫化水素を使用しない定性分析法の研究」を体系化されたことはまさに驚異的で、分析化学における“木羽”の名声を高めただけでなく、東北大学から理学博士の学位を受けられました。

1949年に金沢大学が創設され、先生は37歳で理学部教授に就任されて理学部の体制強化に深く関わられました。理学部は旧第四高等学校の校舎を使用することになっており、何の設備もない教室を、限られた予算で化学実験室に調えるという困難な仕事を、教養部学生の講義の合間に精力的に成し遂げられました。

化学科の学生が専門課程に進学して、分析化学の講義と学生実験が始まると、先生は自らお書きになった謄写刷りのプリントを毎回準備されました。学生がノートをとるときに冒す誤記を防ぎ、かつ余白に補記できるように工夫されており、多くの卒業生が“あのプリントが卒業後も大変役に立った”と述懐しております。

1952年から卒研が始まり、実験後に教授室のストーブを囲んでF. Feiglの“Chemistry of Specific, Selective and Sensitive Reactions”の輪講が夜の更けるまで行われたのも懐かしい思い出です。先生が作詞・作曲さ



れた「化学の歌」には“暖炉に赤く火は燃えて 外国の書読まれゆく”とあります。ここで学んだ実に多彩な化学反応に関する知識が後の研究に大いに役に立ちました。

さて、木羽先生と言えば「強リン酸法」というのが合言葉になっております。初めはマンガン定量を目的で酸化剤である過ヨウ素酸カリウムを合成し、ある時その硫酸溶液に火鉢の炭を入れて加熱したところ、炭が溶けて紫色のヨウ素が発生したのがきっかけで、当時定量が困難であった単体炭素の迅速分析に使えるのではないかと発想を転換されたのが始まりです。試行錯誤の後、不揮発性のリン酸を加熱濃縮した媒体が驚異的な分解力をもつことがわかり、「ヨウ素酸カリウムによる単体炭素の迅速容量分析法」として第一報が「分析化学」第2巻に掲載されました。本法は阪大や名大で生物化学の研究に応用され、論文を通して世界的に知られるようになりました。「強リン酸を使用する新分析法」の創成に対して、中日文化賞、第1回分析化学会学会賞が贈られました。

“重箱の隅をつつくような研究はするな”と言うのが先生の持論でした。京大の藤永太郎先生が木羽研究室訪問の印象記を「化学」第21巻に書いておられますが、“木羽教授は折詰の寿司を折箱ごと溶かすと言っておられる”とのエピソードを紹介されたのは、まさに当を得たものと思います。先生の研究に対する情熱はその後も衰えず、「抽出クロマトグラフィー」をはじめ、常に新しい分離分析法の開発を目指しておられました。

一方、先生は理学部長、図書館長として大学の運営に、また、本会会長として学会の発展に多大な貢献をされました。さらに様々な科学研究費の代表者としても、また県・市の環境行政にも指導的な役割を果たされました。

ところで先生の能筆は多くの知るところで、色紙には好んで唐時代の魏徴の詩「人生感意気 功名誰復論」を揮毫されました。先生の生き様そのものと言えましよう。

木羽先生には公私ともに多大なご指導を賜りました。心からお礼申し上げます。20年前に他界されました最愛の奥様とご一緒にどうぞ安らかに眠り下さい。

〔金沢大学名誉教授 寺田喜久雄〕